

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 上原 泉 印

学位申請者 石毛 順子

論文名 第二言語習得における作文教育の意義と特殊性

【審査結果】

本論文は、第二言語での作文活動を社会文化的アプローチの視点から捉えることで、日本語教育における作文指導のあり方を提案しようとするものである。近年、日本語教育の分野で社会文化的アプローチによる追究が提言されるようになったとはいえ、この理論を実践に結びつけた研究は未だに少ない。そのような状況のなか、本論文は、この理論を実践に結びつけ、より広範囲に適用可能な指導のあり方を探ることに果敢に挑戦している。

審査委員会は、論文審査と最終試験（公開審査）の結果、全員一致して博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は、上原泉を主査に、副査として、申請者の主任指導教員として長くにわたり心理学の基礎と社会文化的アプローチの理論に基づく研究法の指導に力を尽くされた田島信元氏（白百合女子大学教授、本学名誉教授）、日本語の指導法について多くの助言を申請者に与えてくださった国松昭氏（本学名誉教授）を学外からお迎えし、学内からは、一昨年度申請者の主任指導教員をつとめられ長く指導されてきた根岸雅史氏、博士前期課程のときから申請者の副指導教員として指導されてきた富盛伸夫氏に加わっていただき、五名の委員で構成された。

【論文の概要】

本論文は、心理学者ヴィゴツキー（Vygotsky, L.S.）に端を発する社会文化的アプローチにより、日本における第二言語の作文教育のあり方について、日本語学習者の日本語での作文活動の実態を把握した上で、第二言語での作文の発達を促すための媒体として下書きと第一言語使用を提案することをねらいとして書かれており、理論的考察と5つの実証研究から成り立っている。以下で本論文の構成と内容について述べる。

本論文は三部から構成されている。1章から4章にかけて、主要な理論を紹介しながらそれらの理論に基づき、第二言語の作文教育のあり方について考察を行い、作文教育について検討すべき点を提案している（「一部」と称する）。5章から9章は「一部」を踏まえて、韓国語を母語とする日本在住日本語学習者を対象に実施した5つの実証研究について紹介している（「二部」と称する）。5章から8章は第二言語の作文活動の実態を捉えることを目的として実施された調査報告であり、8章、9章は、作文の発達を促す媒体を探ることを目的として実施された調査報告である（8章は実態把握と媒体を探ることの2つを目的として

実施された調査の報告である)。最後の 10 章では、実証研究で得られた結果を「一部」で説明した理論に基づき解釈し、本研究の意義について十分な考察と提言を行っている(「三部」と称する)。各章の内容を以下で紹介する。

1 章では、「書くこと」とはどのようなことかについて考察している。即時性がもめられるが相手とやりとりすることによりその場で修正を可能とする「話すこと」とは異なり、目の前にいない読み手にも伝わるような言葉にしなければならないものの、活動過程において行きつ戻りつができ、準備と推敲がもめられる点を「書くこと」の特徴として重視している。この特徴をヴィゴツキーの媒介理論、すなわち「主体 対象という二者関係ではなく、主体 媒体 対象という三者関係を最小の単位として人間の活動を理解するべきである」という理論にあてはめると、作文を書く主体は媒体を介して、対象とみなせる作文を作成しているという解釈が可能であるとした上で、主体と作文(対象)を媒介する有効な活動が下書きなのではないかと提案している。書く過程で用いられる下書きは、書く過程を円滑にするのみならず、作文活動やその結果できあがる作文自体を変革する可能性がある有効な媒体であるということを論じている。「書くこと」は「話すこと」以上に教育を必要とする技能であるとし、「書くこと」に対する教育、すなわち作文教育が実際にはどう行われているのかを確認するため、日本と各国の第一言語での作文の教育の状況についてまとめている。

2 章では、第二言語で作文を学ぶ意義を、心理学における転移という現象を参考にして検討している。転移とは、簡潔にいうと、先行する学習が後続の学習を促進させるような現象(ときとして妨害する場合もあるが多くの場合促進させる方向に働く効果)のことを指すが、その観点から第二言語と第一言語の関係について考察し、第一言語が第二言語の学習を進める上での媒体となっていると論じている。その説明の中で、第二言語で作文を学ぶ意義として、第二言語を学習することによって第一言語を対象化でき、第一言語の力を高める可能性があることや、第二言語で書くことが他の技能領域の学習を促進する可能性があることを指摘している。

3 章では、労力と時間を要する第二言語での作文の学習に継続して取り組むようにさせるにはどうしたらよいかについて、動機づけの視点から考察を行っている。有能感が学習者の学習継続に影響を及ぼすことがこれまでの多くの知見より示されているとし、作文教育における動機づけの重要性を論じている。また、学習ストラテジーと動機づけの関連性を示す複数の過去の知見を引用し、媒介理論に基づくと、媒体である学習ストラテジーと動機づけの間の密接な関連を示すものとして理解できるとしている。動機づけを考慮した効果的な教育のあり方については、ヴィゴツキーの最近接領域の理論に即して、理論的考察を行っている。

4 章では、1~3 章での考察を踏まえ、どのようなことを明らかにするために 5 章以降の調査を実施したのか、実証研究の具体的な目的が述べられている。

5章では、学習初期から中期にかけて、作文の内容、構成、言語形式の側面においてどの部分が発達しどの部分が発達しないのかを調査を実施し検討している。従来の研究で用いられてきた評価方法と評価基準に基づいて作文を評価した結果、初期から中期にかけては、構成や言語形式に関する項目において作文の評価点は上昇するが、内容に関して上昇する項目は少ないことを明らかにしている。

6章では、第二言語の作文学習に対する学習者の意識について、学習者の意識調査に基づき検討している。調査では、学習レベルの違いにより意識に違いがあるのかもみるため、初級レベルから上級レベルの学習者を対象としレベル間での比較も行っている。「作文を書きたいのはどんな時か」に対する回答を分析した結果、「書く内容が思いつく時」「他の3技能と違った、書く技能の特性を使う時」「第二言語で作文を学習していく上での喜び・満足感が感じられた時」というカテゴリーが抽出され、「第二言語で作文を学習していく上での喜び・満足感が感じられた時」が上級レベルの学習者において多かったと報告している。また、「作文を書きたくないのはどんな時か」に対する回答を分析した結果、「自分の考えを日本語で表すことに困難を感じた時」「望まないテーマについて書かなければならない時」「書くテーマ・内容が思いつかない時」「書くことが義務で、制約がある時」「作文に集中できない時」の5つのカテゴリーが抽出され、学習者のレベルによる違いはみられなかったとしている。これらの調査結果に基づき、書く意欲を高めるための方法として、作文の意義と特性の提示、書くための材料の収集、作文時の辞書使用をあげ、過去の文献にも触れながら考察を行っている。

7章では、実際にはどのように作文を書いているのか、すなわち、作文を完成させるのにどのような活動を行っているのかを、実施した調査結果に基づき考察している。調査では、学習者のレベルの違い（初級、中級、上級）や作文の質の違いによる差の有無を比較検討している。データの採取は Think aloud 法により行われた。データを行動面から分析した結果からは、上級と全ての成績上位群で多く見られた活動は「外部リソースによる助け」（例えば、辞書使用）であること、内容成績上位群・構成成績上位群では「草稿を読む」が多くみられたが上級では多く見られなかったことが示されている。また、第一言語と第二言語のどちらを使用していたのかという側面から分析した結果からは、初級において第一言語使用が多いこと、成績下位群では言語形式成績下位群のみで第一言語使用が多いこと、内容成績下位群と構成成績下位群では第一言語はあまり多くはないこと、内容成績中位群において第一言語使用が多いことが示されている。

8章では、作文を書くための活動として「下書き」を取り上げ、実証的に調べるとともに、媒介理論と最近接領域の理論に即して考察している。調査から示されたこととして、ほとんどの学習者が下書きを書いてはいたがレベルが上がっても下書きを使用しない者もいたこと、また、特徴的な下書きとして3つのタイプが抽出されたことを報告している。その3つとは、(1) 作文全体の重要な事柄が簡単に書かれているタイプ、(2) 文字や語彙の確認のみが行われているタイプ、(3) 原稿用紙に書かれた作文とほとんど同一の作文が書かれ

ているタイプであったとし、(1)のタイプ使用者は初級から中級にあがるにつれ増えていたものの、全体数としては非常に少なかったことを指摘している。また、(2)のタイプ使用者の人数は全体数が少なく、レベルによる使用者数の違いもなかったこと、(3)のタイプの下書き使用者は、初級から中級にあがるにつれ減ったが、3つのタイプの中では一番多くの学習者が利用していたタイプであったことを報告している。

9章では、初級から上級の学習者を対象に、第一言語での下書き活動が、第二言語による作文執筆に及ぼす影響について検討している。調査では、学習者が第一言語で下書きをしてから書いた第二言語の作文と、第一言語で下書きをせずに書いた第二言語の作文を比較している。その結果示されたこととして、第一言語を使用しない時より第一言語を使用した時の方が成績が悪いという評価項目はみられなかったこと、第一言語を使用しない時より第一言語を使用した時の方が成績のよい項目がみられ、その項目は構成の下位項目である「論理的つながり」であったことを指摘している。

10章では、本研究の実証的研究により得られた知見を、先行研究や1章から3章で検討した理論との関係を含めて総合的に考察し、本論文の意義として以下の6点にまとめている。(1)第二言語の作文の発達において、言語形式・構成の発達と内容の発達に差が生じることを示し、理論に即して考えると、作文活動において言語形式と構成が内容の発達の媒体となりうることを指摘したこと、(2)学習者の書く意欲を高める要因と減退させる要因を特定し、書く意欲を高めるための手段について考察したこと、(3)全般的な日本語能力レベルの観点からのみならず、作文の成績の観点から行動を分析したことで先行研究と異なる知見を得ることができ、行きつ戻りつの活動過程、すなわち思考と言葉の抽象化と再認識を行う過程を経て作成されることを十分に論じることができたこと、(4)媒介理論の視点から最近接領域の理論に即して考えた場合の有効な媒体の1つ目として下書きを取り上げ、調査の結果みられた複数の下書きのタイプについて考察し、望ましいタイプの下書きにどのようにすれば移行できるのか提案したこと、(5)同様に考えた場合の有効な媒体の2つ目として第一言語を取り上げ、実証的研究により第一言語の効果が初級から上級レベルの範囲でみられることを示した上で、第一言語が第二言語による作文活動の媒体として有効な理由を十分に考察し結果の一般化に貢献したこと、(6)第二言語で作文を学習する意義について考察したこと、である。そして、最後に今後の展望と課題について述べられている。

【審査の概要と評価】

高く評価された本研究の意義は次のとおりである。第一に、5つの実証的研究の目的が焦点化され多角的に追究されていること。第二に、作文活動のプロセスと意識に焦点がおかれ、表面的な量的分析にとどまらず質的分析も十分に行われていること。第三に、「書くこと」の特殊性について十分な考察が行われていること。第四に、日本語教育における作文指導のあり方について理論的な枠組から考察したこと。第五に、従来、十分に検討され

てこなかった，第一言語使用の影響を実証的に追究し十分に考察したこと。

以上の点を本研究の成果として高く評価した上で，最終試験（公開審査）ではいくつか改善の余地がある点が指摘された。まとめると次のとおりである。第一に，作文の評価基準は従来の基準を用いているとはいえ，配点に疑問を感じる点があり，構成と内容を必ずしも区別しきれない問題や書く能力の定義により評価の仕方が変わりうるという問題があり，新たな評価基準を作ったほうがよいのではないかと指摘があった。この作文評価の問題に関連して，複数の評定者間での評定の一致の問題もあげられた。第二に，媒介理論や最近接領域の理論の枠組のもと研究を行っているが，作文活動における社会文化的な側面に関する議論が十分ではないとの指摘があった。第三に，第二言語での下書きと第一言語での下書きを直接比較していない問題や，全文書くタイプの下書きと要点のみを簡潔に記すタイプの下書きは必ずしも対立的に区分できないのではないかと意見が述べられ，多様な種類の下書きを比較検討する必要性が指摘された。

以上の難点は，いずれも，先行研究で共通してみられる問題に関連しており，申請者の力量を評価し今後の研究の進展を期待するからこそ出された意見だといえる。これらの指摘に対し石毛順子氏は丁寧かつ誠実に応答し，これらの問題を今後の課題としてあらかじめ自覚していた様子が伺えた。

論文の内容と最終試験（公開審査）の結果を審議した結果，審査委員会は，課程博士論文として十分評価されるべき論文である判断し，全員一致して博士（学術）の学位を授与するにふさわしい論文であるとの結論に達した。